文章表現及びその産出過程における批判の影響

堀 田 朱 美

Ⅰ．問題と目的

ことばに対する関心は古く，心理学の分野ではコミュニケーションの手段としてよりも発達的な側面が重視されてきた。本研究では，ことばの中でも，文章を書くことに焦点を絞って研究を進めた。この分野の主流は作文の研究にある。産出される文章を決定する要因としては，内的な部分が重視されてきた。Flower & Hayes (1980) のモデルによれば作文は，課題状況・長期記憶・情報処理過程の3部分からなり，それらが相互に関連し合っている。本研究では課題状況，特に読み手を意識することに関して考え，先行研究に示される反対意見の影響力を考慮して，読み手を意識させる手段として批判を用いることにした。また，批判そのものとしての影響も検討する。桐木ら（1985）は，文章の要約作業は，構えと文章化の2つの側面を持つとしているが，文章産出のすべての作業に同様のことが言えると思われる。予備実験，実験Ⅰ・Ⅱを合わせて以下の仮説，①批判を経ることにより意見を表す文章の表現は緩和される，②批判を経ることにより意見を表す文章に類型的な表現は減少する，③自己批判よりも他者批判によって文章表現は構え・文章化，双方の側面で大きな影響を受ける，④他者からの批判は，文章表現の変化につながる，つながらないにかかわらず，内的な調整を促進する，⑤批判は読み手を意識し，一般的な視点を獲得することを促進する，の検証に加えて，内省，結果の一貫性，ケースごとの内容についても検討する。

Ⅱ．予備実験

自己批判により実際に文章が変化し得ることの確認，変化が仮説①②を支持しているかの検証を目的とする。対象は大学生。統制群・実験群の2群により，批判及び無関係な作業をはさんで，作文の内容の変化を見る。得られたエピーソードを，主題に対し「支持」「中立」「批判」の3種に分類し，分散分析で検定したところ，「支持」のエピソードが pre-test において $p<.01$で有意に多かった。独創性については分散分析の結果，実験群において$p<.10$で頻出エピソードが少ない傾向が，条件×試行×立場でも，$p<.10$の交互作用の傾向が見られた。各被験者の変化から個人内の仮説に準ずる傾向がわかった。また立場により変化が異なることも示唆された。

Ⅲ．実 験 Ⅰ

自己及び他者による批判が，文章表現にどのように影響するかを批判の方法・主題に対する立場から検討し，仮説①②③を検証する。対象は大学生41名，統制群・自己批判群・他者批判群の3群。実験室において個別実験として実施した。実験に先立ち，主題「校則」に対する意見により被験者を等質な3群に分ける。まず校則について中立的な立場から書かれた文章を読み，校則についての意見文を書く。統制群は無関係な文章を読み、自己批判群は自分の文を批判し，他者批判群は逆の立場にある文章を読み，対立する部分に線を引く。その後，校則について意見を書き，内省を質問紙と自由記述で書く。

得られた文を1主語と1述語に区切り，論点と呼ぶ。それぞれの論点を「支持」「中立」「批判」の3種に分類し，pre-test でもっとも多くの論点が費されているものを，各被験者の立場とし，それぞれ分散分析で検定した。「中立」は，試行×立場において$p<.0001$で有意差が得られ，条件×試行×立場で$p<.10$の傾向が見られた。また，「批判」は試行×立場で$p<.0001$の有意差が得られた。pre-test では異なっていた論点が，post-test では似通ってきている。これらは，予備実験で示唆された立場により批判の影響は異なることと整合的である。また仮説③も，文章化については支持されたと言える。仮説①は，「中立」と「批判」の間で意見の表現は明らかな緩和をみているので，支持されたと言える。自由作文は個人差が大きく，個人ごとの変化が同じ方向に向いているわけではないことが，集団としての有意差を得られにくい原因になっているとも考えられる。個人の変化を見ると，最も多くを占めている論点が pre-test と post-test で変わっている被験者は統制群で3名，自己批判群で8名，他者批判群で10名であり，明らかに批判を得た方が変化が大きい。中立も1つの主張であり，「校則」という1つの主題に対して3つの対立する主張が存在するのではないかと考えると仮説①③は支持されたと言える。仮説②については有意な差は得られなかった。質問紙による内省はいずれの項目にも有意差は見られなかったが，統制群と自己批判群は似たような結果である。他

者批判群は特徴的であり，1項目を除いて常に平均値はもっとも高い（低い）。この点から，他者による批判の書き手の構え，及び構えの変化の文章表現への影響が示唆され，仮説③が構えの面でも支持される。自由記述の内省と，他者批判群で試行間の変化が大きいという事実は相容れないが，これはより強く自分を主張しようとすることと，逆の立場を意識したり，客観的に書こうとすることとの兼ね合いの結果であろう。補足的に分析した表面的な文章表現については，試行間に有意差が見られた。post-test では pre-test に較べて，強い語調を持つ「記述」や「疑問」が有意に増加している。意見を強く主張するという意図の他に，平板な文章を避け，文章を修飾する目的も持つのであろう。自由記述の内省と合わせて，自分の考えが明確になってきたことで，このような結果が得られるのではないかと考えることができる。

Ⅳ．実　験　Ⅱ

文章表現の変化をもたらす内部調整を，推敲による文章の訂正及びそれに関連する内観を手がかりに検討し，仮説①③④⑤を検証することを目的とする。被験者は大学生29名。手順は実験Ⅰに準じ，2回めの作文の代わりに推敲を行い，内観を述べる。

訂正の数・一文あたりの訂正の数は統制群に較べて実験群の値の方が明らかに大きいが，分散が大きい為に，有意差が得られなかったと思われる。新たに書き加えられた部分のうち，主語と述語の組が含まれているものが，統制群で20組，自己批判群で32組，他者批判群で27組見られ，やはり実験群の方が多く，統制群ではそれらが4名によって産出されているのに対し，実験群では全く訂正のなされなかった2名を除く全被験者が新たな論点を書き加えていた。内省の質問紙は分散分析の結果，1項目で$p<.10$の傾向が見られたのみであった。量的な分析は個人差が大きく，統計的に有意な差には結び付かなかったことは実験Ⅰと合わせて，自由作文は個人差が大きい為に統計的に有意な差が得られにくいとする，安西・内田（1981）の考察と整合的である。また，文章産出の研究において個人的な分析が重要であることも示唆している。内観を13種に分類した結果は，各群とも大きな差は見られないが，その中でも実験群で「緩和」が多い点が目に付く。特に他者批判群では，「緩和」が多いことに合わせて，全体の訂正数の多い中，「強調」が全く見られない点にも注目される。仮説①はここでも支持されたと言うことができよう。内田（1985）は，作文過程を書き手と書き手の想像した読者との対話ではなく，むしろ思想と表現とのズレを調整しようとする「自己内対話」であるとしているが，作文の過程とほぼ同様であると考えられる推敲の過程には双方が含まれていると，結果からは考えることができる。自己内の対話と想像上の読者との対話を対極におくことが可能なのではないかと考え，モデルを作成した。あくまでも1つの可能性であるが，今後の研究の価値のある問題であるように思われる。内省の質問紙は全体に表現に関する項目で統制群の，内容に関する項目で実験群の得点が高い。結果からは，批判は複雑なレベルの修正を促進させると考えられれ。個々の内観より，批判により1つの訂正に対し多くの内観が得られ，読み手が意識され，一般的な文章表現への変化をすることが示唆され，仮説④⑤は支持される。

実験Ⅰ・Ⅱの結果を合わせて，批判は双方向に文章表現の変化を促すことが示された。その為，統計的な有意差は得られにくいが，個々のデータから他者批判の影響の大きさを伺うことができる。文章産出の際に外的な課題状況が，同じ意見を表すにも文章の表現を変化させることが示された。内省の質問紙で差が見られなかった点に関しては，批判に影響され易い人と気にしない人がいるという可能性の他に，自分を強く主張することは意識の中でなされているが，緩和は意識しないで実行されているという可能性も考えられる。

Ⅴ．反省と今後の課題

文章の産出に関する作文は，目立った活動が始まって未だ10年足らずという若い分野であり，今後の課題は山積している。教育の実践に学び，かつそれに生かせる研究が必要とされるであろう。個人差・生の産出課程を生かせる研究が，今後の課題である。

Ⅵ．文　献

Flower, L. S. & Hayes, J. R. 1980 The dynamics of composing : Making plans and juggling constraints. In L. Gregg, & E. Steinberg (Eds.), Cognitive processes in writing. Hill Sdale, N. J. : Lawrence Erlbaum Associabes.

桐木健始・岡　直樹・石田　潤・森　敏昭　1985　文章の表現と理解に関する研究（8）日本教育心理学会第27回統会発表論文集，616—617.

内田伸子　1985　作文の心理学——作文の教授　理論への示唆——，教育心理学年報，25，162—177.

他